

日本のコンテンツ産業における執事の描かれ方

—漫画『黒執事』を一例として—

200162 武田 奈々

序章

近年、日本のポップカルチャーが世界で流行し、その中でも日本の漫画やアニメは、数多く受容されるようになってきた。遡ると 1970 年代から日本の漫画やアニメは欧米やアジアを中心に普及し始め、2010 年には政府が「クールジャパン」として日本の魅力を伝える戦略を打ち出し、日本のコンテンツと観光を結びつけるようになった。また、電子書籍とインターネット配信の普及は、日本の漫画・アニメ市場の拡大に大きく貢献してきただろう。現在に続く漫画やアニメの普及に従い、日本の文化に興味を持ち、観光を目的に来日する外国人観光客も少なくはない。さらに、漫画から文化を学ぶ可能性は、外国人だけでなく日本人にも適応されるのではないだろうか。例えば、2019 年に大ヒットしたアニメ『鬼滅の刃』では、登場人物がそれぞれ着る羽織には和柄が使われており、市松模様や麻の葉模様などの日本の伝統文化を、多くの日本人が知るきっかけとなった。同様に、海外の文化についても漫画で扱われた場合、日本人が興味を示し、作品を読む中で自然と学ぶことができると考えられる。

本論では、漫画『黒執事』を一例として取り上げ、アニメや実写映画、翻訳など物語のコンテンツが発展する中における執事文化の描かれ方を主題とする。漫画『黒執事』は全世界累計 3,400 万部を超えており、現在も月刊『G ファンタジー』で連載され、2021 年には連載 15 周年を迎えた。作品の舞台は 19 世紀のイギリスであり、貴族である 13 歳の主人シエル・ファントムハイヴと、彼に使える執事セバスチャン・ミカエリスが「女王の番犬」として様々な裏仕事を請け負うという物語である。アニメや実写映画、ミュージカルなどの多岐に渡ったコンテンツが充実しており、各コンテンツにおける執事を含めた英国文化の描かれ方や物語の改変が文化理解へどのように影響しているかを明らかにすることを目的とし、漫画やアニメにおける文化理解の可能性について検討したい。研究方法は、漫画やアニメ、映画などのコンテンツの比較研究および、作者や製作者へのインタビューやアンケート調査の分析である。

第 1 章では、執事の文化とその歴史について、語源や言葉の意味から確認し、イギリスと日本それぞれの職業の成立と仕事内容について比較しながら相違点について論じる。また、漫画『黒執事』のキャラクターをもとに、使用人の仕事内容と漫画での立ち振る舞いを含めた仕事の描かれ方について論じる。

第 2 章では、アニメや実写映画、翻訳における『黒執事』を取り上げ、原作である漫画との相違点を取り上げる。さらに漫画の作者やアニメの制作者へのインタビュー、そして視聴者へのアンケート調査をもとに、制作側と視聴者側で異なるニーズが発生している可能性

について検討する。

第3章では、英国の伝統的な執事像とは異なり、日本で独自に発展してきた「日本の執事のイメージ」に言及し、執事喫茶やマナー講座などの関連性について論じる。また、漫画が日本語教育で活用されている事例をもとに、日本文化を学ぶ場としての漫画の可能性について検討する。

第1章 執事文化の歴史と日々の仕事

本章では、「執事」というイギリス文化の歴史を振り返り、イギリスと日本における現代の執事の仕事や環境の変化について扱う。はじめに、イギリスの歴史的執事と現代の執事の仕事内容を確認し、イギリスの執事らしさについて論じる。次に日本の執事の歴史と仕事内容、そして漫画や雑誌における執事文化の登場について調査する。最後に、漫画『黒執事』におけるキャラクターの特徴とそれぞれの仕事内容、キャラクターから読み取れるイギリス文化的要素について検討する。

第1節 イギリスにおける執事

本節では、イギリスにおける執事に着目する。「執事」という言葉の語源を確認し、現在イギリスで執事の育成や派遣を行なっている機関をもとに、執事の仕事内容や社会における立ち位置について論じる。

まず、執事の語源とその仕事内容について確認する。イギリスで人材派遣を行なっている *Staff of Distinction*(2022)によると、Butler の語源は“Buttle”を意味する“bottle”から派生したアングロ=ノルマン語である“buteler”に由来していると言われている。その理由として、通常は男性使用人がワインのボトルの管理を行い、提供するという役割があったからとされている。特に歴史上では、富裕層のワインセラーはかなりの価値を持っていたため、最も信頼できる使用人がワインを扱うことができる特権を持つとして、執事という職業が作られたとされている。また、*Staff of Distinction*(2022)は執事の役割や仕事内容としては、(1)ワインと酒の在庫の管理、(2)銀、クリスタル、その他の貴重な陶磁器や食器の管理、(3)ゲストへの対応、(4)すべての食事時間の監督、という4つの義務を果たすことが伝統的な執事には求められるとしている。

しかし、現在の執事の仕事内容は、その働く環境が変化したことによって柔軟に対応してきている。イギリスで実際に現在執事の育成や派遣を行なっている *Pole&Tweed*(2016)は、1920年代から1980年代半ばにかけて執事サービスは劇的に減少し、その理由として社会における階級制度が整えられ、上流・下流の考え方が薄まったからだ指摘している。しかし、過去10年間で執事の役割は増加し、裕福な家庭が執事を雇いたいと考えるようになり、*Pole&Tweed*(2016)は執事を雇う意味を「富と成功の象徴」と表している。また、現代の執事に求められる仕事として、*Staff of Distinction*(2022)は次の11個の要素を提示している。(1)家事と全ての使用人の管理、(2)家の維持管理、(3)ゲストの出迎え、(4)電話対応や一般的な用事を行う、(5)他の使用人の給与管理、(6)雇用主のニーズに応える、(7)簡単な家事をこなす、(8)家の安全と防犯、(9)家計の管理と予算の計画(10)、食料品の購入と在庫の管理、(11)イベントの企画や旅行の手配(*Staff of Distinction*, 2022)。執事の仕事環境が社会の変化に伴い、上流階級のみではなく富裕層まで広がったことで、より幅広く複雑な仕事が求められるようになったと考えられる。

また、現代の文学や映画内における執事について *Pole&Tweed*(2016)は、文学や映画に登

場する執事というキャラクターの役割は人々の興味をそそり、魅了するものであると評価し、質が高く、模範的な執事は自分が見たものの詳細を決して明かさないが、その執事が目撃したものの示唆ですら、文学研究の対象をなるほどの魅力的なテーマであると捉えている。つまり、全てを語らないからこそ文学作品に解釈の余地が出て、多くの人が議論するテーマをなりうる性質を、執事という役職が元々持っていたことは、視聴者や読者だけでなく映像制作や小説家にとっても重要なキャラクターになりうるということが考えられる。

さらに、イギリスの執事の特徴として、Longman Dictionary of English Language and Culture(1992)では、Butler について以下のように定義されている。

In Britain, the STEREOTYPE of a butler is of a very calm, EFFICIENT, polite man who has no sense of humour and never appears to be shocked or surprised by anything. People sometimes make jokes about the fact that, in old British DETECTIVE stories in which someone is murdered, it is often the butler who is found to be the murderer. (p.160)

ここで特徴的であるのは、“polite man who has no sense of humour”とユーモアを持たない礼儀正しい男性であり、何があっても驚いたり衝撃を受けたりすることがないという点である。“Stereotype”(典型的)とあるため、現代における執事のイメージとは完全に一致するわけではないが、この典型的な執事のイメージについてイギリス文化研究者の新井(2011)は「一方では上昇志向で勤勉だが、どこか小市民的で、酒好きなワーキング・クラスの男性としての顔。そして他方では、洗練され経験と知識が豊富だが、決して感情を表に出さない、優秀な執事としての顔を持っている」(p.62)と、執事には使用人の中でもより強い特徴やステレオタイプがあると言及している。元から執事に対して強いイメージがあることは、作品の中で執事を描く際にある程度キャラクター像が成立した状態であり、服装や仕事内容、性格などの設定が簡単になりやすく、また、人々も受け入れやすいのではないだろうか。

本節では、執事という言葉の語源が“bottle”から来ており、ワインの管理という仕事からイギリスでの時代の変化に伴い仕事内容がより広く、深く発展してきたことが理解できた。また、文学や映画内で登場する執事やイギリス執事の典型的なイメージとして、ユーモアを持たず、寡黙的であるためにより魅力に見えるという特徴を持つことが理解できた。

第2節 日本における執事と執事作品の増加

前節では執事という文化の成立と、仕事の内容についてイギリスを中心に歴史的に振り返り、時代の変化に伴って執事の仕事内容も変化してきたことを理解した。本節では日本における執事の歴史と、現代での執事の仕事内容についてイギリスと比較しながら論じていく。さらに、日本において執事を扱った作品が増えた時期を確認し、執事という文化が日本で流行するきっかけとなった作品や時期について論じる。

まず、言葉として執事の説明と、歴史上における執事の登場とイギリス的な要素を持つ執事の発現について確認する。『新明解国語辞典』(第7版、2012)において、執事は「身分・地位のある人のそばに居て、事務のさしずをしたり、実際にことを運んだりする人」(p.642)とされている。日本での最初の執事は明治時代から存在しているとされている。英国文化研究者である久我(2018)によると、もともと武士であった華族が明治時代になり、「家令」という職員を家の維持のために雇っていたが、家事使用人ではなく、日本語で「執事」にあたる人の仕事内容は家の財政管理や主人の社交関係の管理など、秘書のような側面を持っていたとされている。

では、現代においては執事が具体的にどのような仕事を求められているのかを確認したい。マイナビ進学(n.d.)によると執事という職業は「旅行・ホテル・ブライダル・観光系の仕事」に分類しており、日本人が執事になる場合は、イギリスに存在するバトラーになるための専門学校に進学して学ぶか、マナーや教養を身につけることでホテルやマンションにおいてコンシェルジュとして働くことであるとしている。また、執事に必要な資質としてマイナビ進学(n.d.)では、高い教養やマナーが富裕層の顧客への対応において必要であり、責任感や貢献する姿勢が重要であるとしている。また、外国のお客様へも柔軟に対応できるように英語をはじめとした語学力も求められるとされている。これらの特徴は前節で見られた現代のイギリスの執事に求められる仕事内容や Pole&Tweed(2016)の掲げる「富と成功の象徴」としての執事のイメージと重なる部分が見られる。

さらに、実際の日本における執事の仕事内容について確認したい。日本バトラー&コンシェルジュ社長の新井は、自身でも執事としての業務を行う一方で、日本国内外の超富裕層向けに顧客を持つ当会社を運営し、多くの講演会や著書において執事としての経験談を語り、所作や作法などを指導している。新井は実写映画『黒執事』やドラマ・映画『謎解きはディナーのあとで』などで執事役の監修を務め、俳優の演技に対して所作指導を担当していた。日経ビジネスで行われたインタビューにおいて、新井は実際の執事の主な仕事内容として3つあると述べている。一つ目は依頼主の自宅の運営である。家の修繕や自宅に必要なメイドやシェフなどの人材の管理などを行っている。二つ目は資産管理として、自宅や別荘、所有する資産の維持管理を行う。三つ目に依頼者の要望に応える秘書のような役割があり、マナーや仕事のスキル、教養などを教える仕事が含まれるという(大城、2017)。仕事内容について述べる中でも新井は「今、ドラマやアニメの影響で執事が人気なので、ちょっとしたパーティでおしゃれにエスコートしますよといった、お遊びのような執事サービスはあるのですが、深いところまでサービスしているのは私たちだけです」(大城、2017)と答えており、雇い主の要望に応える重要性や柔軟に対応する必要性について指摘している。本来は富裕層が自宅や資産の管理を目的として雇っていたものが、ドラマや映画の影響で富裕層以外にも執事という職業が知られ、エスコートや執事喫茶のような一般家庭でも受けられるようなサービスの発展に繋がったのではないだろうか。

次に執事作品の変遷について論じる。執事作品のイメージについて、久我(2018)は、「誰

でも執事になれる」ことが大きな変化の一つとして挙げ、また英国執事としての要素は少なかったと述べている。「誰でも執事になれる」とは、それまで職業として馴染みが少なく、お金持ちの家で代々仕えるものであったものが、1990年代の作品からはお嬢様や坊ちゃんのパートナーとしての描かれ方をするようになったことを表している。「じいや」のような老執事が登場していた流れから、若い執事や青年執事が物語で描かれるようになったことで、幅広い年齢設定が可能となった執事が主人に仕えるものになり、脇役からメインキャラクターへとその立場を変化させていった。しかし、1990年代に登場する執事は英国的な要素は少なかったと久我(2018)は指摘している。久我(2018)によると、「銀食器磨きや執事養成学校などの言葉が作品に出てきたものの、『上級使用人』『ワインの管理者』『パーティーの主催者』など裏方の仕事は十分に描かれていません」(p149)と指摘しており、その理由として久我(2018)は英国執事の資料が当時は少なく、執事の仕事やその実像が鮮明ではなかったためではないかと分析している。資料の不足が、逆に日本における執事の描かれ方を自由に発展させ、主人に忠実に仕える存在だけでなく、パートナーとしての執事や少年ほどの幼い執事、お嬢様の恋愛対象になりうる執事などというような多様性を生んだと考えられる。

さらに、日本において執事を題材として扱った作品が増加していることについて雑誌の検索性を元に分析する。久我(2018)は雑誌データベース「大宅壮一文庫」で「執事」を含む記事を検索し、検索性が増える執事ブームがいつ起きているかを明らかにした。図1は1990年から2017年の間に執事について書かれた雑誌記事の件数である。特徴的なのは2007年以降の執事喫茶に関する記事の増加である。2006年から日本において執事喫茶と呼ばれるカフェ形式の店舗が増え、それに伴って雑誌でも多くの記事や特集が組まれることとなった。また、図2は2007年から2017年において執事について書かれた雑誌記事の、作品ごとの内訳を表したグラフである。具体的な作品名として『謎解きはディナーのあとで』、『大統領の涙』、『黒執事』、『メイちゃんの執事』が取り上げられている。久我(2018)は原作がベストセラーであることやドラマやアニメなど作品が多く作られたことによる雑誌記事での比率の高さから、『謎解きはディナーのあとで』、『黒執事』、『メイちゃんの執事』の3つの作品を「日本の三代執事作品」として挙げている(p.16)。特に『謎解きはディナーのあとで』と『メイちゃんの執事』はドラマ作品であったために、漫画やアニメを見ない世代や視聴者層に対しての執事文化の普及に大きな影響があったと考えられるだろう。

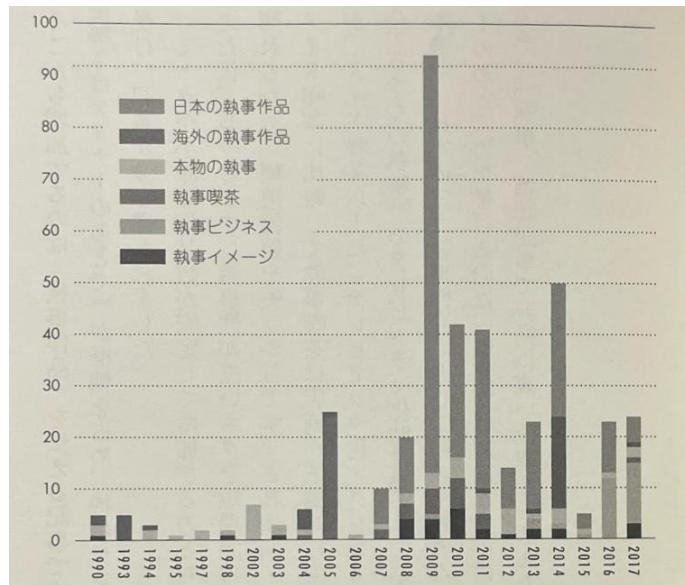


図1 キーワード「執事」で検索して出た雑誌記事数
(久我, 2018, p.15)

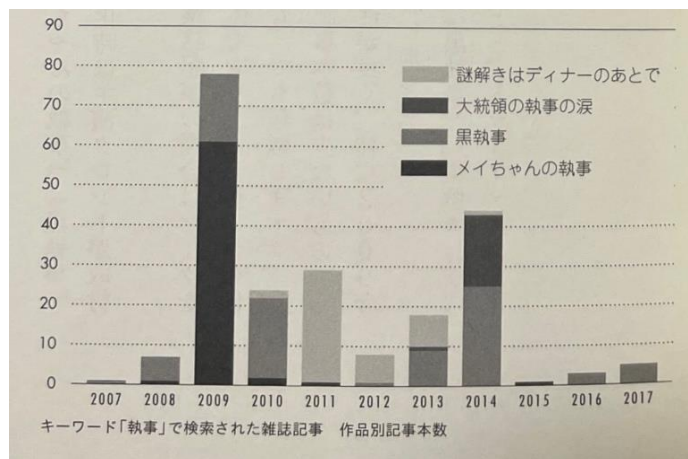


図2 キーワード「執事」で検索して出た雑誌記事数の作品別本数
(久我, 2018, p.15)

本節では、日本における執事という文化の発現とその仕事内容を取り上げ、典型的な執事像や歴史上異なる点はあるものの、現代の執事として求められる資質や仕事内容はイギリスと日本で共通していることが理解できた。また、2006年以降の執事に関する雑誌記事の増加や作品の増加から日本における執事ブームの変遷について理解することができた。

第3節 黒執事におけるキャラクターとその仕事内容

前節では日本における執事という文化の成立とその仕事内容について確認し、雇用主のニーズを満たすために仕事内容の幅が広がったことがイギリスでの変化と共通していることを論じた。また、雑誌やドラマで執事が取り上げられることによって視聴者が増え、執事という職業への理解や関心が高まったことも推測された。本節では、漫画『黒執事』の公式キャラクターガイド(2009)を参考にしながら、漫画『黒執事』に登場する使用人とその仕事内容、そして漫画内での立ち振る舞いについて分析する。また、主人であるキャラクターを中心に貴族文化や住んでいる建物についても論じる。

はじめに、漫画『黒執事』に登場する使用人について確認する。中心となるキャラクターは執事セバスチャンである。執事(バトラー)の仕事内容は「酒類の管理に責任を持つ使用人。部下のフットマンを監督して食卓の給仕や銀器の管理を行う。(中略)家令と執事が両方いることは少なく、家令の下に(中略)下位職が置かれる場合もあった」(村上, 2019, p16)とあるが、漫画でのセバスチャンはワインを扱うことは少なく、屋敷にいる使用人の人数が少ないために全ての仕事を1人で請け負っている。主人であるシエルがまだ子供であることや、漫画の内容においてワインへのこだわりは物語に関わるのが少ないことから、ワインの描写や執事の仕事としてワインを扱うことはないと考えられる。一方で部下を監督するという点では、他の使用人たちへ指示を出している場面は見られるため、執事として使用人を取りまとめているという実際の執事の仕事内容と一致している部分もあると考えられる。また、彼は執事としての美学を持っており、「契約が続く限り彼の命令に従うのが執事の美学ですから」(『黒執事』、第3巻、p.64)というセリフは作中に何度か登場している。主人であるシエルも執事セバスチャンを「忠実な僕」であるように扱うため、執事の誠実性や忠実性がより漫画で強調され、セリフが繰り返し用いられていることから人々のイメージに影響すると考えられる。

次に、執事であるセバスチャン以外の使用人5人について分析する。1人目は家令(ハウス・スチュワード)であるタナカである。『図解英国執事』(2019)による説明では「家内の使用人のトップに立つ使用人頭。主人の個人付き使用人を除くスタッフの採用と解雇を担当する。(中略)相当に規模の大きな家にしかこの職は置かれない」(p.16)とされている。しかし、漫画のキャラクターとしての設定上、タナカはほとんど屋敷内で仕事をしない。シエルの父親にあたる先代から執事として仕えていたとされるが、現在は若き当主であるシエルと執事セバスチャンを見守る、屋敷の重鎮的役割であるとして、家令という役割が与えられていると考えられる。また、年齢も先代から支えていた執事であるために、老執事や老紳士というような表現が好ましい男性であり、燕尾服を着て落ち着いた様子の子のイギリス的執事のイメージを重ねることができる。

2人目はコックであるバルドロイである。コックの仕事内容はキッチンメイドを助手とし、家族の食事を調理ことであり、多くの家では賃金の安い女性がついた職業であったとされている(村上, 2019, p17)。しかし、『黒執事キャラクターガイド』(2009)では「実際は料理

の仕込みが主な担当である彼だが、持ち前の兄貴気質と、使用人としての自負から、他の使用人たちのリーダー的存在だ」(p.28)と紹介されており、豪快で異性の良いキャラクターとして描かれている。実際の屋敷で働く料理人は客人の前に現れたり使用人のリーダー的役割を果たしたりしないが、作中では表に立つことの多いキャラクターであり、ここでは史実的な要素よりも作者の描きたいキャラクターの性格や性質が優先されていると考えられる。

3人目はハウスメイドのメイリンである。ハウスメイドはリーダーであるハウスキーパーの下につき、掃除などを担当する。メイリンは目が悪く、よく物を落としたり間違えたりするドジなキャラクターとして描かれている。漫画『黒執事』第1巻第1話では、客人へワインを給仕するが、手元が震えてこぼしてしまうという場面がある(p.31)。メイリンは普段屋敷の掃除や洗濯を中心に働いていたために、このように客人への食事の給仕をすることも彼女の仕事内容であるように漫画では描写されているが、実際のメイドの仕事としてはランドリーメイドやハウスメイド、キッチンメイドのように細かく区別され、その仕事内容も分担されている。漫画では屋敷に1人しかハウスメイドが存在しないために、ハウスメイドという一つの役職の中でさまざまな仕事を行い、史実にあるようなメイドの区別はつけていないと推測できる。

4人目の庭師(ガーデナー)であるフィニアンの仕事内容は、「菜園や温室、果樹園を手入れし、自家製の野菜や果物をキッチンに提供する。装飾用の花も作る。大きな家では数十人の見習いを部下に使っていた」(図解英国執事、2019、p.16)である。フィニアンは物語の設定上、力が強く、なんでも破壊してしまうため、庭で作業していてもきちんと整備できたことがなく、執事セバスチャンを困らせている。また、『黒執事キャラクターガイドブック』(2009)には、「主人であるシエルに褒められるような理想の庭を作れるよう、立派な庭師を目指して努力に励む毎日だ」(p.30)とあり、庭師というよりも見習いの段階であることが伺える。

最後5人目はフットマンという役職についているスネークである。スネークは漫画11巻から新たに使用人として向かい入れられるキャラクターであり、主人であるシエルから「今日から僕の屋敷に來い」(『黒執事』11巻、p.96)と言われ、仕えることとなる。『図解英国執事』(2019)では、フットマンは「華やかなお仕着せを身につけ、客の対応や、馬車での外出の付き添い、食卓の給仕を行う。接客業務がないときは執事と共に銀食器の手入れに従事した」(p.16)という内容が仕事であるとされている。スネークが初めて主人となるシエルの外出に付き添うのは漫画『黒執事』第11巻である。他の使用人が留守を頼まれる中、執事セバスチャンが「従僕(フットマン)は主人の外出に同行するのも仕事ですからね」(p.133)と説明しており、作品内でフットマンの役割や仕事内容の一部が記述された最初の場面である。

次に、前述した使用人の主人にあたるシエル・ファントムハイヴの身分や生活環境について確認する。『黒執事キャラクターガイド』(2009)では、由緒正しき伯爵家であり、英国一の玩具・製菓メーカーを営んでいることが説明されている。彼の家系は女王の命令を遂行する特務執行機関の長を務めており、フィクションとしての設定がかなり含まれているた

め、イギリスの身分制度がはっきりと描かれていることはなく、伯爵家がどのように資産運用しているのかについてや、身分の違いによる文化の差などの描写はあまり見られないと思われる。

さらに、イギリスの気候や貴族文化と合わせて屋敷について説明されている場面がある。『黒執事』第2巻では、町屋敷(タウンハウス)にシエルとセバスチャンが移動し、屋敷(マナーハウス)には使用人たちが留守番を任されるという場面がある。ここで漫画では「英国の夏は短い。最も気候の良い5～8月は『社交期(シーズン)』と呼ばれ、地方の屋敷(マナーハウス)から貴族たちはこぞって町屋敷(タウンハウス)へ社交に精を出す」(p.36)と説明されており、英国文化を知らない日本人読者が学ぶきっかけとなっていると考えられる。

以上のように、漫画『黒執事』のキャラクターの描かれる使用人は、漫画の舞台や時代が19世紀末のヴィクトリア女王時代であるために、職種としては忠実に描かれているが、執事セバスチャンの「主人に忠実である」という命令遵守の心構えは現代の執事の仕事内容や前節で確認した、日本バトラー&コンシェルジュ社長の新井が考えているような執事像に近いことが伺える。

本章では、イギリスと日本の執事文化の歴史に焦点を当て、歴史的とされる執事の仕事と現代の執事に求められる仕事や資質を比較し、一定の決まった仕事を持ち、雇われることが富裕層に対して「富と成功の象徴」であった役割から、幅広い要望に応え柔軟に対応するように変化してきたことが分かった。また、漫画『黒執事』のキャラクターをもとに、英国における使用人の役割と漫画内での描かれ方について論じ、役職名について歴史的な英国執事や使用人を参考にしているものの、キャラクターの性格や個性を優先するために仕事内容や忠実な描写はされないことが分かった。次章ではアニメや実写映画、翻訳に注目し、それぞれでの物語の変化について論じていく。

第2章 物語の翻案と翻訳による影響とその変化について

前章では、イギリスと日本の執事文化の成立と、それぞれの国における仕事内容について確認した。また、漫画『黒執事』に登場する使用人キャラクターの職種と仕事内容、その忠実性を検討した。そこで本章では、漫画やアニメと実写映画、そして翻訳された『黒執事』に着目し、それぞれにおける執事や各役職の描かれ方の違いを比較し、それらの変更点がどのように読者や視聴者のイメージへ影響するかについて論じていく。はじめにアニメ産業に焦点を当て、その規模と発展を振り返ったのちに、アニメ『黒執事』で新たに作られたキャラクターやセリフの改変について論じる。次に2014年に製作された実写映画『黒執事』を取り上げ、視聴者のニーズとの差異について分析する。さらに海外での漫画市場へ目を向け、漫画『黒執事』の翻訳における工夫と執事文化やイギリス文化の伝え方について論じる。

第1節 アニメ『黒執事』における物語の改変

本節では漫画やアニメといったコンテンツ産業の拡大と日本文化としてのイメージを確認し、アニメ『黒執事』についてこれまで制作されてきた作品を参考に、アニメ独自のキャラクターやそのキャラクターの設定から、原作キャラクターとの相違点を論じる。次に、アニメ制作側へのインタビューをもとにアニメ独自のストーリーやキャラクターが作られた理由を検討する。さらに漫画とアニメで異なるセリフに着目し、省略されたセリフによる視聴者の理解への影響について論じる。

はじめに、日本におけるコンテンツ産業と日本文化として漫画とアニメが認知されてきたことについて確認する。国際交流基金による調査を分析した熊野・廣利(2008)の考察によれば、海外の需要としてはアニメのヒットが先行し、その後に原作である漫画の普及、そこから漫画のジャンルが細分化され市場が拡大するという流れがあると見ている。また、メディア学について研究している葉口(2022)は「メディアミックス」という観点から日本のコンテンツ産業の動向を分析している。メディアミックスとはある商品を複数のメディアを通して宣伝する方法であり、日本のマーケティングや広告分野において生まれた造語とされている。国内でも海外と同様に、アニメがヒットしたことによる漫画の出版部数への影響は大きいと見られ、漫画とアニメの市場動向は密接に関係していると考えられる。まず、市場の流れのきっかけとなるアニメ産業について『アニメ産業レポート2022』(一般社団法人日本動画協会、2023)では、コロナ禍以前の2019年の最高値を上回る2兆5,145億円であり、分野別ではビデオ、配信、商品化、海外の4つが成長している部門であった。アニメ市場においては国内と海外での市場規模は近年ほぼ同等になりつつある。一方、漫画産業については、出版業界全体としても不況が続き、2000年以降に電子コミックが登場してもあまり浸透していなかった。そんな中、2019年に電子媒体が紙媒体の利用数を抜き、またコロナ禍であった2020年では漫画市場は推計6,126億円という過去最高の記録となった。葉口(2022)が指摘するように、「漫画とTVアニメの関係は不可分であり、互いの業界が密接に関連しながら両社の市場を発展させてきた」(p.73)と言えるだろう。

さらに国内でのアニメの広がりを受容のされ方について、株式会社モニタスがインターネット上において 2021 年の 5 月に全国の 15 歳以上の男女約 50 万人を対象に行ったアニメに関するアンケート調査では、誇りに思う日本文化という項目に対し、「和食」と答えた人が最も多く 61.5%であった中、「アニメ・アニメーション」と答えた人が 4 番目となる 43.2%であった。つまり日本人は日本文化の一つとして「アニメ」を認識している人が多いことがわかる。また、アニメの海外市場についても、『アニメ産業レポート 2022』（一般社団法人日本動画協会、2023）では 2021 年は 1 兆 3,134 億円と、コロナ禍前の 2019 年を経ても上昇する傾向にあり、国内外両方においてアニメという文化が広まっていることが分かる。しかし、ヨーロッパにおいてフランスに次ぎ 2 番目のコンテンツ市場であるイギリスについて、日本貿易振興機構(2019)による調査では、「子供向けコンテンツがアニメ放送の主流である英国において、アニメは『子供のもの』というイメージが今なお根強く残っている」(p.6)とされており、イギリスではアニメはニッチな産業であることを念頭におくべきであると述べている。このように、国内においてはアニメ産業は経済への効果が大きく見込まれるため、漫画をアニメとして放送する価値が高いことが伺える。また、海外において日本のアニメ作品が子ども向けを思われていながらも市場規模としては拡大していることから、アニメ作品の制作はコンテンツ産業において重要な役割を果たすことが考えられる。

次に『黒執事』のアニメ作品とそれぞれの内容について確認する。最初のアニメは 2008 年に全 24 話放送され、第 6 話までは漫画と同様の内容だったが、第 7 話からはアニメ独自のストーリーとなり、原作にいなかった天使などの登場人物が増えている。その後 2010 年に全てがアニメ制作のために新しく作られたストーリーである『黒執事Ⅱ』、漫画の第 6 巻から第 8 巻の内容を取り入れた『黒執事 Book of Circus』、OVA(オリジナル・ビデオ・アニメーション)である『黒執事 Book of Murder』、劇場版アニメ『黒執事 Book of the Atlantic』の 5 作品が放送された。また、2024 年には第 6 作品目になる『黒執事』が放送予定であり、漫画の第 11 巻から第 14 巻の内容を扱った内容である。

特徴的なのはアニメ『黒執事』と『黒執事Ⅱ』の内容である。原作にあった登場人物に加えて多くの独自キャラクターが加えられ、原作者の枢やながそれらアニメキャラクターのデザインも担当している。アニメにおいて特徴的な登場人物を表 1 にまとめた。2008 年のアニメ『黒執事』では、敵対するキャラクターとして天使という設定のアンジェラと女王陛下に仕える執事アッシュが登場する。また 2010 年のアニメ『黒執事Ⅱ』では、原作のキャラクターである執事セバスチャンと主人シエル・ファントムハイヴに敵対する貴族として、執事クロード・フォースタスとその主人アロイス・トランシーがアニメでは追加キャラクターとして制作された。主人アロイスの生い立ちは原作キャラクターであるシエル・ファントムハイヴと非常に類似しており、屋敷に使用人が少ないことや主人へ絶対的に忠実な姿勢などは共通している。

表1 アニメ『黒執事』、『黒執事Ⅱ』で追加されたキャラクター

アニメ『黒執事』のみのキャラクター	特徴、職種
アンジェラ	ハウスメイドであり、その正体は天使であった
ブルートウ	魔犬。アンジェラに仕える
アッシュ	女王陛下に仕える執事

アニメ『黒執事Ⅱ』のみのキャラクター	特徴、職種
アロイス・トランシー	生まれて間もなくさらわれ、行方不明となっていたが、漆黒の執事・クロードとともに帰還した
クロード・フォスタス	主人であるアロイスに絶対の忠誠を誓う、謎の執事
ハンナ・アナフェローズ	トランシー家に仕えるメイドで、褐色の肌をしている

(アニメ『黒執事』、『黒執事Ⅱ』公式ホームページより筆者作成)

アニメ『黒執事Ⅱ』は最初から全ての話がアニメのみの新しいストーリーであることが判明していたため、アニメそれぞれの話のタイトルの付け方も原作や他の時期のアニメとは異なっている。表2では漫画とアニメのタイトルの違いをまとめたが、2008年のアニメでは、一見漫画と話のタイトルが同じように見えるが、第4話以降はオリジナルのタイトルが増えている。アニメは1話あたり約30分であり、漫画の1話分を収めるには内容が少ない、またはセリフを全て入れると分かりづらい構成になることもあり得るため、アニメの話数と漫画のタイトルが異なることは起こりやすい事象である。また、アニメ『黒執事Ⅱ』ではタイトルに「執事」という言葉が入っていないながらも、漫画とは全く異なる言葉の構成がされているので、視聴者はタイトルを見ただけで漫画とは違う話なのではないかと気づくのではないだろうか。

表2 漫画とアニメでのタイトルの違い

話数	漫画『黒執事』第1巻 (2006)	アニメ『黒執事』 (2008)	アニメ『黒執事II』 (2010)
第1話	「その執事、有能」	「その執事、有能」	「クロ執事」
第2話	「その執事、万能」	「その執事、最強」	「単(ソロ)執事」
第3話	「その執事、最強」	「その執事、万能」	「女郎(めろ)執事」
第4話	「その執事、最凶」	「その執事、酔狂」	「テロ執事」

(d アニメストアより筆者作成)

また、2014年になるとアニメ『黒執事 Book of Circus』が製作され、2017年には劇場版アニメ『黒執事 Book of the Atlantic』が公開された。コミックナタリーでは『黒執事』の担当編集者である熊剛へインタビューが行われた。インタビュー内ではアニメ第1、2作品目でのオリジナル要素についても答えており、コミックナタリーで行われたインタビューによると、熊剛は第1作品目と2作品目のアニメを放送した段階ではまだ原作が溜まっておらず、当時アニメを制作するためにはオリジナルを作るしかなかったと述べている(坂本、2017)。通常アニメでは最低でも単行本が5冊以上ないと制作が難しい中、原作の内容が増えるのを待つのではなく、オリジナルストーリーで話数を稼いで制作を続けていた。

また、原作がある場合でも熊剛は「全部話も締まっているので、修正するとしたら盛るしかないんですよね」(坂本、2017)と答えている。盛るということは、話の内容やキャラクターを増やし、アニメとして放送したい時間に合わせて調整するということであり、劇場版アニメ『黒執事 Book of the Atlantic』では原作に登場しないチャールズ・グレイとチャールズ・フィップスというキャラクターが追加されている。この二人は原作に登場しているキャラクターではあるが、劇場版アニメ『黒執事 Book of the Atlantic』の内容にあたる漫画12巻から14巻では登場機会のないキャラクターであり、劇場版アニメの制作者が話を膨らませるために追加されたキャラクターである。追加した理由として熊剛は、アニメの内容は既に原作では完結しているため「(漫画には出てこなかったキャラクターをサプライズとして登場させるという)サービスを入れることでファンは喜んでくれるだろうと」(坂本、2017)と答え、劇場版アニメの初稿段階では、もっと多くのキャラクターが登場していたが、アニメの構成や時間を考慮した中でキャラクターの人気度の高いものを残したという。

さらに、具体的にセリフの改変や省略を見ていく。第1章第3節において触れた、漫画『黒執事』第11巻において執事セバスチャンが「従僕(フットマン)は主人の外出に同行するのも仕事ですからね」(p.133)と、作品内で初めてフットマンの仕事内容についてのセリフに対して、劇場版アニメ『黒執事 Book of the Atlantic』ではこのセリフが省略されている。つまり、フットマンであるスネークが主人に同行することが仕事の一部であるという描写が、劇場版アニメの視聴者には伝わらないことが考えられる。

本節では、アニメ『黒執事』のシリーズを取り上げ、アニメの独自キャラクターとアニメのタイトルについて漫画と比較し、漫画に登場するキャラクターと対照的になるような設

定が作られていながらも、性格や仕事内容は類似していることが理解できた。また、アニメ制作過程において、アニメの構成や時間を考慮することによるキャラクターの追加や削除、さらにセリフの改変や省略があることが分かった。さらにそれらの変更は使用人の仕事内容の説明であったことから、省略における視聴者の、使用人の仕事やイギリス文化への理解のしづらさに影響することが伺える。

第2節 実写映画『黒執事』での改変と視聴者のニーズ

前節ではアニメにおける『黒執事』の物語の改変について、アニメの独自キャラクターを作ることによって内容を膨らませたり、セリフを削ることによってアニメの時間内に収めたりするなどの特徴がみられた。本節では、アニメによって認知度が高まり、制作されることの多い実写映画に着目し、漫画との比較、検討をする。はじめに実写映画の物語の舞台設定とキャラクターの違いについて確認したい。さらに、制作者へのインタビューから実写映画に必要な要素や制作者側の考える視聴者のニーズを確認したのちに、アンケート調査をもとに実際の視聴者が求めている実写映画に必要な要素を確認し、相違点について論じる。

はじめに、実写映画のあらすじや物語の設定について確認する。実写映画『黒執事』は2014年に制作された。物語の舞台は2020年、アジアの架空都市と設定され、漫画の舞台である19世紀末からかなり時代が進み、イギリスではなく日本を思わせるような国が舞台である。巨大企業ファントム社を経営する名門貴族である幻蜂(げんぼう)家の4代目当主幻蜂清玄(げんぼうきよはる)と、彼に使える執事セバスチャンが女王からの密命を受ける「女王の番犬」として活躍していくという物語である。当主の清玄は剛力彩芽が演じ、両親の死後、自分が女性であることを隠しながら男装して男として生きることを決めたという設定である。映画化について作者枢やなは、剛力彩芽の出演について「爽やかなイメージのある彼女が「黒執事」に出演して下さるというお話を伺った時、とても驚きました。さらに剛力さんが演じるオリジナルキャラクターは男装の麗人だとか。なんという耽美設定！」(マイナビニュース、2013)と答え、映画化における改変について原作者である枢は肯定的な意見を持っていることが伺える。

この実写映画は原作漫画の設定からかなり改変されている。原作との相違点として一つは、場所の設定という違いがある。撮影場所としては佐賀県にある英国風の建物内を使用し、イギリスを意識した宮殿やリビングなどをセットとして利用しているものの、アジアが舞台とされている。さらに、主人公の名前や性別というような要素が変更されていることや新しくキャラクターが追加されていることも原作とは異なる点である。

表3では原作と設定や名前が変わっている主要キャラクターについてまとめている。表3から分かるように、映画の設定舞台がアジア、つまりおそらくは日本であると考えられる場所であるために、多くの名前が漢字を使用、または日本人らしい名前に変更されていることが分かる。さらに、職業についても、スコットランド警察(ヤード)とされる人物が警察保安省とされていたり、家令のタナカは「老執事」田中として紹介されたりしている。漫画で

あれば言葉として視覚的に認識できるためにイギリスの文化であっても漢字表記の上からカタカナでルビをふることで大まかな説明をすることができるが、映像作品では説明したいことは全て音声で伝える必要がある。そのため、約 2 時間という制限のある映画では情報が省略、または簡略化される傾向があると推測される。

表 3 原作と設定や名前が変わっている主要キャラクター

漫画『黒執事』での名前	漫画での地位や職業	実写映画『黒執事』での名前	実写映画での地位や職業
シエル・ファントムハイヴ	ファントムハイヴ社を経営する伯爵家当主	幻蜂清玄(げんぼうきよはる)	ファントム社を経営する貴族である幻蜂家の 4 代目当主
メイリン	シエルに仕えるハウスマイド(先代には仕えていない)	リン	先代から仕える、ドジなメイド
葬儀屋アンダーテイカー	裏社会に詳しい情報屋	葬儀屋ジェイ	ミステリアスな痛い運搬人
チャールズ・グレイまたはチャールズ・フィリップ	ヴィクトリア女王陛下に仕える秘書	チャールズ・ベネット・サトウ	駐在員であり、西側諸国の女王直属の秘書武官
マダム・レッド	シエル・ファントムハイヴの叔母	若槻華恵	清玄の叔母であり、ファントム社の共同経営社

実写映画の公式ホームページ(映画『黒執事』製作委員会、2014)の人物相関図より筆者作成

また、映画の内容についても新しく独自に制作されたと考えられる。実写映画の公式ホームページでは次のように紹介されている。

(前略)...2 人(清玄とセバスチャン)は女王から大使館員の“連続ミイラ化怪死事件”の解決を言い渡された。現場に残されたのはタロットカード。時同じくして、街から次々と少女たちが失踪する出来事がおきていた。万能な執事セバスチャンの調査により、二つの事件を結ぶ「黒い招待状」へと辿りつく。しかし、その招待状が示された先は踏み入れてはならない世界だった。招待状を手にした清玄は窮地へと追い込まれる。

世界を巻き込む事件の黒幕の目的とは、そして事件の犯人は...! ?

(映画黒執事製作委員会、2014)

原作と一致するのは「女王からの命令」のみであり、事件の内容や犯人像などは新しく作られている。名前の違いや物語のあらすじも原作とはかけ離れていることから、実写映画の『黒執事』は原作の設定をベースとして利用した、全く新しいストーリーであると考えることができるだろう。

このような改変に対して、マイナビニュースでのインタビューで、映画プロデューサーの松橋真三は「19世紀のイギリスを舞台にしたのが原作だが、そのままのアプローチでは実写映画化はできない。そこで、今の日本の最高のスタッフ・キャストで実写映画化をするにあたり、時代設定を一新して、新しくストーリーを構築しました」(マイナビニュース、2013)と答えている。つまり、漫画のキャラクターを現実の人間では演じきれない、または表現できないために、実写映画でも辻褃が合うように脚本家をはじめとして制作側が調整しているのである。コンテンツに合わせて内容を改変する動機がある点では、前節で扱ったアニメにおいて話数や時間調整のためにアニメ独自のキャラクターを制作する過程と共通していると考えられる。

次に、実写映画化について視聴者が求める要素について、アイブリッジ株式会社が2017年に実施したインターネット上のアンケート調査を使用して分析する。この調査は20歳から59歳の男女合計800名を対象に行われ、漫画や映画を見る頻度や実写映画化についての意見についてまとめられている。図3に示されている通り、実写映画化についての意見調査では、どの年代においても実写映画化についての肯定的・否定的な意見な同程度の割合であり、どちらも20%前後となっている。どちらもないという意見がどの世代も最も多く、実際に視聴するかどうかや映画の内容などは考えなかった場合は、世間的に実写映画化が受け入れられていると考えられる。

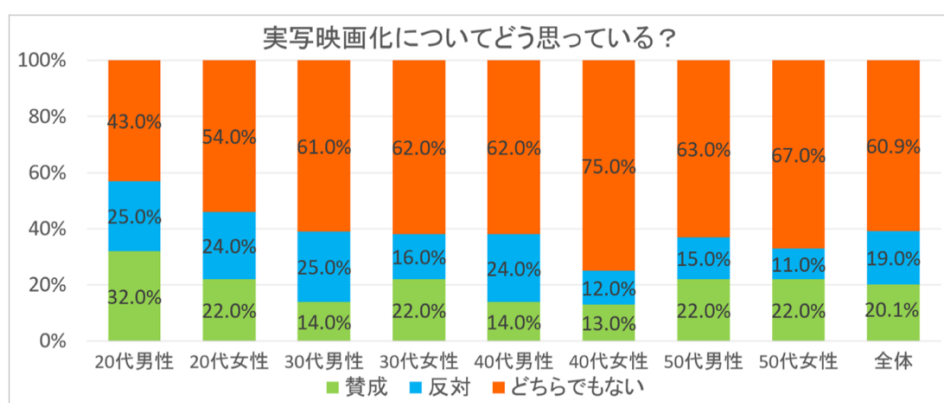


図3 実写映画化についての意見調査(アイブリッジ株式会社、2017)

次に、好きな漫画が実写化された場合に映画館に観に行くかと、それに対して否定的な回答をした対象者の理由について分析する。図 4 は自分の好きな漫画が実写映画となった時に観に行く人の割合を表したものである。合計部分をみると、全体の約 4 割の人が観に行くことに肯定的な意見を持つ一方で、約 6 割が「あまり観に行かない」または「観に行かない」と答えている。同社の他のアンケート項目の中で実写映画の視聴方法を聞いた際、「地上波」での視聴が観たことが無い場合を除いて最も多かったことから、映画館に赴く機会が少ないまたは実写映画以外を目的として映画館に行かない人も多いと考えられるが、図 4 の「好きな漫画が実写化された場合に映画館に観に行くか」という質問では「好きな漫画」であったとしても肯定的な意見は 35.9%と半数と下回る割合となっている。つまり漫画のアニメ化や映画化においては作品のファンによる視聴や映画視聴への動員を考えて制作している面もあると考えられるが、漫画作品が好きだからといって映画化作品を視聴するとは限らないことが分かる。

	20代 男性 (78人)	20代 女性 (70人)	30代 男性 (76人)	30代 女性 (65人)	40代 男性 (67人)	40代 女性 (62人)	50代 男性 (60人)	50代 女性 (52人)	合計 (530 人)
必ず観に行く	6.4%	7.1%	4.0%	7.7%	3.0%	6.5%	5.0%	1.9%	5.3
たぶん観に行く	16.7%	12.9%	15.8%	9.2%	13.4%	12.9%	11.7%	17.3%	13.8
おそらく観に行く	23.1%	18.6%	17.1%	16.9%	13.4%	9.7%	13.3%	21.2%	16.8
あまり観に行かない	24.4%	27.1%	31.6%	33.9%	25.4%	33.9%	36.7%	40.4%	31.1
観に行かない	29.5%	34.3%	31.6%	32.3%	44.8%	37.1%	33.3%	19.2%	33.0

図 4 好きな漫画が実写化された場合に映画館に観に行くか
(アイブリッジ株式会社、2017)

さらに、図 5 は実写映画を映画館にあまり観に行かない、または観に行かないという否定的な意見を述べた回答者を対象に聞いた理由について各項目の割合を表している。最も多い項目は「原作のイメージが崩れる」ことに対して 34.8%の回答があり、続いてキャストの内容や漫画実写化をしてほしく無いという、人がキャラクターを演じる点について否定的な意見を持っている人が多いという結果であった。また、図 6 からは、視聴者が映画実写化に求める要素として、キャラクターの再現度を 32.3%、原作通りのシナリオを 27.6%、世界観の再現度を 27.0%の回答者が求めている。原作通りのシナリオや世界観の再現度といった要素は実写映画『黒執事』ではかなり改変されていたため、視聴者の満足度は下がったのではないかと推測される。加えて図 6 によると、そもそも「実写化して

ほしくない」と回答した人が合計で30.6%いることがわかる。つまり、漫画の内容を役者が演じることへの不安や世界観の再現が不可能であることから、視聴者は実写映画を求めていることが推測される。

	20代 男性 (71人)	20代 女性 (71人)	30代 男性 (48人)	30代 女性 (43人)	40代 男性 (47人)	40代 女性 (44人)	50代 男性 (42人)	50代 女性 (31人)	合計 (397 人)
好きなマンガを実写化してほしくない	28.6%	39.5%	35.4%	25.6%	31.9%	25.0%	19.1%	22.6%	24.7
原作のイメージが壊れる	38.1%	53.5%	43.8%	41.9%	34.0%	43.2%	26.2%	45.2%	34.8
キャストに納得いかないと思う	28.6%	41.9%	35.4%	32.6%	23.4%	29.6%	16.7%	25.8%	25.2
実写映画の予告に期待できない事が多いから	16.7%	16.3%	8.3%	7.0%	6.4%	11.4%	14.3%	0.0%	8.8
原作のストーリーや、キャラクターの設定が無視されることが多いから	28.6%	20.9%	25.0%	30.2%	19.2%	25.0%	14.3%	16.1%	19.4
映画館以外(テレビやDVD等)で観るから	9.5%	9.3%	6.3%	7.0%	6.4%	15.9%	21.4%	25.8%	10.3
映画館に行かないから	11.9%	18.6%	25.0%	20.9%	8.5%	9.1%	14.3%	12.9%	13.1
そもそも映画を観ない	7.1%	9.3%	12.5%	14.0%	4.3%	9.1%	9.5%	9.7%	8.1
その他	11.9%	0.0%	4.2%	0.0%	2.1%	4.6%	2.4%	6.5%	3.3
特に理由はない	9.5%	9.3%	12.5%	11.6%	36.2%	22.7%	33.3%	9.7%	15.9

図5 実写映画を見ない理由(実写映画の鑑賞に対して否定的な意見を述べた回答者を対象、アイブリッジ株式会社、2017)

	20代 男性 (100 人)	20代 女性 (100 人)	30代 男性 (100 人)	30代 女性 (100 人)	40代 男性 (100 人)	40代 女性 (100 人)	50代 男性 (100 人)	50代 女性 (100 人)	合計 (800 人)
原作とは違うシナリオ	16.0%	9.0%	13.0%	5.0%	6.0%	10.0%	5.0%	5.0%	8.6
原作通りのシナリオ	20.0%	28.0%	28.0%	26.0%	27.0%	28.0%	31.0%	33.0%	27.6
キャラクターの再現度	35.0%	40.0%	25.0%	30.0%	22.0%	40.0%	31.0%	35.0%	32.3
アクションシーンの再現度	27.0%	23.0%	17.0%	14.0%	9.0%	15.0%	12.0%	8.0%	15.6
世界観の再現度	33.0%	37.0%	25.0%	28.0%	15.0%	26.0%	28.0%	24.0%	27.0
原作のイメージに合ったキャスト	30.0%	40.0%	24.0%	23.0%	15.0%	32.0%	27.0%	29.0%	27.5
映画オリジナルキャラクターの登場	7.0%	3.0%	5.0%	5.0%	1.0%	6.0%	4.0%	3.0%	4.3
その他	3.0%	1.0%	2.0%	2.0%	1.0%	1.0%	2.0%	1.0%	1.6
実写化してほしくない	28.0%	28.0%	32.0%	27.0%	44.0%	31.0%	27.0%	28.0%	30.6

図 6 映画実写化に求める要素(アイブリッジ株式会社、2017)

本節では実写映画『黒執事』をもとに、キャラクターや時代設定、名前などにおける漫画との違いを明らかにした。さらに実写映画制作者へのインタビューより、制作側はアニメの制作過程と同様に、放送時間や話のボリュームを踏まえた上での作品の改変や省略をおこなっていることが考えられた。さらに、視聴者への実写映画に関するインタビューの分析から、制作側と視聴者のニーズには差があり、多くの視聴者は原作通りのシナリオや世界観の再現度を求めており、そもそも実写映画に対して否定的な意見を持ち、好きな漫画であっても映画館へ見に行かない可能性も高いことが理解できた。

第3節 漫画『黒執事』と翻訳による変化

前節では、実写映画における『黒執事』の改変と視聴者の求めるニーズとの差異について論じた。本節では、視聴者を海外へと広げ、日本語ではなく英語として漫画『黒執事』を読む際の工夫や翻訳手法について確認する。本節では漫画よりもはるかに長い歴史を持つ小説の翻訳手法を参考にしながら、翻訳学としての前提知識と漫画における手法について確認し、漫画『黒執事』においてどのような工夫がされているか論じていく。

文学研究者である澤村(2020)によると、海外、主にアメリカの市場で漫画が普及するようになったのは1990年代からであり、その発展の起点となったのは2002年の海外版『少年ジャンプ』であった。つまり、漫画が本格的に翻訳されるようになってからはまだ30年余りしか経っておらず、その歴史は浅いと考えられる。漫画『黒執事』の翻訳方法を分析する

ために重要視したい手法は2つある。1つ目は「異化的・同化的翻訳」である。異化的翻訳とは原作に使われている言語や文化的背景に忠実であろうとする翻訳であるのに対し、同化的翻訳は翻訳する先の言語的表現や文化に合わせようとする翻訳の工夫である。異化的翻訳の特徴として、英語版『黒執事』の巻末には、図7のような“Translation Note”と書かれた注釈が数ページ記載されており、全ての英語版の巻末にあるが、日本語版の漫画にはないものである。日本の文化やイギリスの歴史や説明など多岐に渡った内容が記載されており、英語版の主な出版先であるアメリカなどの漫画市場を意識した構成要素であると考えられる。



図7 Translation Note (Kuroshitsuji 1, p190)

また、図8からはイギリスの歴史や史実についての注釈も記載していることがわかる。第2巻から第3巻にかけては「ジャック・ザ・リッパー」が事件の犯人像として使われており、1888年にイギリスロンドンで実際に起きた未開悦の殺人事件とその犯人の名称である「ジャック・ザ・リッパー」という名前がそのまま用いられている。ジャック・ザ・リッパーは連続殺人犯であるとされているが、その最初の犠牲者であるメアリー・アン・ニコルズは漫画でも同名の人物が最初の犠牲者として描かれ、事件が起こった場所もホワイトチャペルであり、史実と共通している。しかし漫画に登場するジャック・ザ・リッパーは史実で語られる人物像とはかけ離れており、実際の事件において犯人像は男性だと予想されているが、漫画ではその犯人は女性とされている。しかも漫画『黒執事』でのジャック・ザ・リッパーの正体は、主人公シエル・ファントムハイヴの伯母であり、元男爵夫人で現在は医者をしているマダム・レッドという人物であった。漫画『黒執事』ではヴィクトリア女王や第1回万博覧会が行われた水晶宮、寄宿学校など当時のイギリスに存在した人物や建物、事件を参考にしながらも、設定を変えて物語に組み込んでいる。そのため、漫画で作られたイメージで定着しまわないうえにも、巻末の注釈は重要な存在になると考えられる。

PAGE 41
Jack the Ripper
 A serial killer who stalked the streets
 of Whitechapel in East London in
 late 1888. Though hotly contested,
 Mary Ann “Polly” Nichols was one of
 the Ripper’s first victims.

図 8 Jack the Ripper の注釈 (*Kuroshitsuji* 2, 2014, p.190)

一方「同化的翻訳」としては、あえてイギリス英語や硬い英語表現を使うという手法が取られていることだと考えられる。『黒執事』の翻訳者である木村(2020)は 19 世紀末という時代背景や主人と執事という主従関係に注目しながら英語への翻訳を行なっている。例えば、漫画で「命令だ 僕を助ける」(『黒執事』 第 1 巻, p.171)というセリフに対しては“*I command you. Rescue me.*” (*Kuroshitsuji* 1, 2014, p.171)と訳されている。「命令」は一般的に“*order*”が使われるが、“*command*”を用いることで、貴族である主人や上の立場のものが従者や下の立場のものへ命令していることを表現している。また、主人公のシエルは年齢が 13 歳であり、主人としては若く子供として見られているため、「主人」を意味する“*master*”ではなく、“*young master*”が使われているといった特徴が見られる。また、主人公シエルが貴族であり、一般的に使われるような会話表現よりも固い言葉を使うことから、聞き馴染みのない英語を使うというような工夫も見られる。「気持ちはありがたいが僕はそんなに休めない」(『黒執事』 第 11 巻, p.128)というセリフは“*I can’t absent myself for such a length of time.*” (*Kuroshitsuji* 11, 2014, p.128)と訳されており、これを日常的な英語訳にした場合の例として、木村(2020)は“*I can’t take that many days off from work.*”になると示している。“*absent myself*”や“*length*”が意図的に用いられており、翻訳者の木村(2020)によれば等価として単純に直訳するのではなく、時代や人物背景に沿った英語表現を選択している。

2 つ目に取り上げる翻訳手法は「オノマトペ」についてである。漫画における擬態語・擬音語の使用例として翻訳手法を研究している猪瀬(2010)は、「『吹き出しなどで文章の一部として使われている』場合と、『吹き出しの外で描き文字として、単体で使われている』場合とに大きく二分することができる」としている。

図 9 は英語版『黒執事』の第 4 巻の一場面である。英語版『黒執事』ではコマの中と外でそれぞれ異なる説明の仕方がされていた。まずコマの中では、主に 1) 日本語表記そのままのオノマトペ、2) ローマ字表記されたオノマトペの読み方、3) 英語によるオノマトペの意味の翻訳、の 3 種類が並べて表記されている。図 9 では「チラッ」という日本語に対し、“*Glance*”という英語、「にっこり」という表現には“*Smile*”と付け、英語読者にも日本語の発音や文字の理解がしやすいような配慮がされている。また、図 9 では、「わあ」や「ほっ」などの発

音が同じオノマトペについては、“Wahh”や“Hoh”というように英語のみの表記となっている。一方コマの外では、2種類の説明が書かれている。一つ目は“SFX”である。SFXとは“Special Effects”の略称であり、効果音のことを指している。「キラキラキラ」という効果音に対して、“SFX : Kira(Sparkle)Kira Kira”と書かれている(*Kuroshitsuji* 1, p.27)。



図9 擬音語の翻訳方法 (Kuroshitsuji 4, 2014, p.49)

このように、漫画全体を通して英語版『黒執事』では翻訳されていない日本語がほとんど見られない。比較文化研究者の大塚(2015)が馴染みのない「セミ」という言葉についてドイツ語に翻訳される際、コマ内のセミの鳴き声を表すオノマトペが翻訳されておらず、日本語の読めない読者にはコマの意味を理解できないと指摘していたが、英語による補足説明やSFXのような言葉を変えた説明を加えることで、すべての読者にすべての文章を理解させることができると考えられる。しかし、図9からわかるように、オノマトペの追加情報は文字としてとても小さいため読みにくくなる可能性もあり、元々の絵を邪魔しないような配置や表記方法を考えるために翻訳者の手間がかかることなどが懸念されるのではないだろうか。

さらに、漫画『黒執事』には繰り返し用いられる、「あくまで執事ですから」という重要なセリフがある。主要登場人物である執事セバスチャンは、主人のシエル・ファントムハイヴに仕え、執事として完璧な家事を行うだけでなく、事件解決や戦いの場面において人間とは思えないほどの能力を持っており、第1巻の最後でその正体が「悪魔」であることが明かされる。彼のキャッチフレーズは「あくまで執事ですから」という、「飽くまで」と「悪魔で」の二つの意味が込められており、このセリフに対して、英語では熟語表現を用いて2通りの意味が取れるようにしたり、注釈において日本語での意味についての解説が述べられ

たりしている。セバスチャンの正体が判明する前の「あくまで執事ですから」(『黒執事』, 第1巻 p.36)というセリフは、英語で“I am merely a butler.”(Kuroshitsuji 1, 2014, p.36)と訳されている。“merely”という、「単に、たったの」という意味が使われおり、直訳するならば「私はただの執事です」という表現に近い。それに対して、完璧主義で人外的な能力を持つ執事セバスチャンが、主人シエルと契約した「悪魔」と判明したとき、セリフが「悪魔で執事ですから」(『黒執事』, 第1巻, p.176)と変化している。ここでの英訳は“I am a devil of a butler.” (Black Butler 1, 2014, p.176)とされ、直訳的に“I am a devil and a butler”とするのではなく、“—a devil of a—”という「すごい〜」という英語表現が用いられている。木村(2020)は「『悪魔』であるセバスチャンと『凄腕執事』のセバスチャンの両方を指す表現」として解説している。また、英語版の巻末における注釈では、このセリフに対して日本語の言葉遊びのようなセリフだとして解説されており、日本語の面白さや多面性を知ることができるような工夫がされている。

以上のことから、『黒執事』は英語読者が理解しやすいように巻末に注釈が付けられ、19世紀末という時代背景や主人と執事という主従関係を意識した英語表現があえて用いられていることが確認できた。また、オノマトペについては、英語と日本語を併用したコマの中の表現方法と、効果音についての解説をコマの外に書くという工夫が見られる。これらは日本語への理解を深めながらも、まだ聞き馴染みのない英語読者にとって読みやすくなっており、日本語としての面白さを保ったまま漫画を理解するために必要な翻訳手法であると言える。

本章では、アニメの独自キャラクターの制作や使用人の仕事内容を説明したセリフの省略から、アニメ『黒執事』からイギリス的要素が削られ、視聴者の英国執事や使用人に対する理解度に影響する可能性があることが伺えた。また、実写映画『黒執事』では視聴者が実写映画に求める要素との齟齬があり、多くの視聴者は原作通りのシナリオや世界観を求めていることが理解された。一方で翻訳された場合は省略ではなく情報の追加が多く見られ、注釈やオノマトペに対する説明が加えられることで、日本語がわからなくても日本文化や日本語の面白さを知ることができる工夫がされていることが分かった。次章では、日本独自の執事文化の形成とイメージの成立について取り上げ、漫画やアニメが文化を理解するためにどのように役立ち、教材として活用される可能性について論じる。

第3章 日本における執事イメージの発展

前章ではアニメや映画はより多くの視聴者を獲得できる一方で、漫画『黒執事』がアニメや実写映画化される中で物語の内容に加え、登場人物の名前や性別の変更や、オリジナルキャラクターが作られる理由を検討し、視聴者が求める要素との相違点を論じた。制作者側は執事や使用人の役職ではなく、物語での設定やキャラクターの個性を重要視していたが、ここではさらに視聴者は執事という役職やキャラクターに対してどのようなイメージを持つのかについて検討したい。そこで本章では、『黒執事』が持つ執事イメージと日本における執事イメージを取り上げ、アニメや実写映画化における改変が執事のイメージを作り出している可能性について論じる。はじめに、執事の名前として『黒執事』に登場する「セバスチャン」のイメージの成立と実写映画における漢字表記された名前の変化について分析する。次に、日本で執事文化として発展してきた執事喫茶や執事とマナー、貴族的イメージとの関連性について漫画内での描写を参考に検証する。最後に、漫画が日本語教材として利用されている事例を取り上げ、文化理解としての漫画の役割について論じる。

第1節 執事のイメージと名前の関連性について

本節では、執事のイメージについて、漫画『黒執事』に登場する執事の名前を取り上げ、定着したイメージについて分析する。また、漫画やアニメのイメージと実際に日本において職業として確立している執事との相違点についても論じる。

まず、執事のイメージについて、「セバスチャン」という名前を取り上げる。日本では多くの作品にこの「セバスチャン」という名前が登場し、執事といえばセバスチャンと思いつかべるようになってきた。日本における執事の名前や愛称が「セバスチャン」とされるのはアニメ『アルプスの少女ハイジ』(1974年)が起点との通説がある。アニメ『アルプスの少女ハイジ』ではハイジは令嬢のクララの話し相手となるためにゼーゼマン家で使えることになるが、そこで家政婦長のロッテンマイヤー、その下で働く男性使用人のセバスチャン、メイドのチネッテが登場する。実際にはセバスチャンより上の立場である、ロッテンマイヤーが使用人の総括であったために「執事」と呼ばれていたが、セバスチャンの行っていた仕事内容から彼が執事という認識も強まったとされている。久我(2018)は「表現者たちが断続的に『執事セバスチャン』を登場させたことで『執事といえばセバスチャン』という共有認識をうみ、さらに『執事セバスチャン』が登場機会を増す流れは『セバスチャン現象』とも呼ぶべきユニークな特徴です』(p.374)と述べており、日本における執事イメージの特徴の一つとして「セバスチャン」という名前を挙げている。キャラクターにおいて名前は、人々の記憶に残るために制作者がキャラクターを生み出す際に大切に作る要素であり、執事とセバスチャンという名前がイメージとして繋がったことは、日本における執事ブームにおいて重要な要素であったと考えられる。

また、漫画『黒執事』では、主人に当たるシエルが執事セバスチャンの名前をつけるという場面がある。執事のセバスチャンは、本当の姿は悪魔であるという設定であるため、契約

を結ぶにあたって主人から名前をつけてもらう必要があった。その時、シエルは「セバスチャン」と名付けるが、その名は昔飼っていた犬の名前から来ている。犬から名前を取ること、主人に従える存在であることや、忠実であることなどが強調され、実際に物語でも主人であるシエルが執事セバスチャンに「嘘はつくな」と命令するなど、その忠実性が表された場面であると考えられる。

一方で、実写映画の『黒執事』では執事の名前は「セバスチャン」のままであるものの、主人シエルの名前は幻蜂清玄(げんぼうきよはる)と変えられている。前章でも述べたように、実写映画『黒執事』において時代や場所が変更された理由としては、日本人が演じるためではないかと考えられるが、原作の舞台設定や実写映画でイギリスらしい家具や建物を用いた雰囲気作りをしている。そのため、日本人らしい名前を持つ人物と原作通りのカタカナ表記の人物が混在することとなり、視聴者が登場人物の持つ背景や舞台設定を理解しづらくなる恐れがあると考えられる。

日本パトラー&コンシェルジュ社長の新井は、映画『黒執事』において演技の所作指導を担当していたが、映画の演出としてお辞儀や礼で執事らしさを出すといった工夫をしていたという(中村、2018)。つまり、実写映画に登場する「セバスチャン」に対しては日本にいる執事としての振る舞いが適応されるように演技指導がされており、伝統的なイギリスの執事や19世紀末という漫画の舞台設定よりも、現代に時代背景を合わせた方が適切であることが伺える。また、新井に対して多くのインタビューが行われているが、その質問で「執事といえばアニメや漫画の執事をイメージするのですが」という言葉から始まる質問や「執事は漫画のようにどんなこともしてくれるのですか」と聞いている記者が多い。つまり、日本人の執事イメージが漫画『黒執事』のセバスチャンのような、完璧主義で主人の命令に遵守する様から作られてきた可能性が考えられるだろう。

本節では、執事の名前として「セバスチャン」を取り上げ、繰り返し用いられることによる日本での執事イメージの定着や、作品における忠実で完璧主義といった執事像の形成に影響していたことが分かった。また、実写映画では舞台はアジアでありながらも屋敷内はイギリスらしい雰囲気を持っていたり、セバスチャンのようなカタカナ表記の人物もいれば、日本人を思わせる漢字の名前を持つ登場人物が混在しており、物語の背景や舞台設定が理解しづらくなったりする可能性があることが理解された。

第2節 執事喫茶とマナー講座への発展

前節では執事のイメージについて、「セバスチャン」という名前がさまざまな漫画で執事の名前として繰り返し用いられ、イメージが定着化したことや、実際に日本で働いている執事のイメージが漫画やアニメと結びつけて考えられていることが分かった。本節では執事と紅茶文化のつながり、そしてマナー講座について取り上げ、執事という文化が日本でどのように根付き、イギリスの執事とは異なった「日本の執事」としてどのように発展してきたのかについて論じる。

はじめに、漫画『黒執事』における執事と喫茶文化の成立について確認する。久我(2018)は「執事喫茶の雰囲気につながる執事描写も散見します」(p207)と、『黒執事』の持つ紅茶や料理を給仕する執事としてのイメージが強いことも指摘している。久我(2018)は現代日本では社交パーティーや銀食器を用いた給仕などは馴染みがないために、伝わりやすいものとして紅茶をいれる姿が執事の仕事として取り上げられるようになり、お茶会や日常描写の中で執事と紅茶の関係が強調されるようになったと述べている。また、図 10 に見られるように、漫画『黒執事』の第 1 巻は紅茶、第 2 巻の表紙はアフタヌーンティーに提供するケーキセットが描かれている。また漫画第 1 巻の第 1 話、物語の始まりは「首都(ロンドン)から少し離れ霧けぶる森を抜けると手入れの行き届いた屋敷(マナーハウス)があらわれる。(中略)当主の朝は一杯の紅茶(アーリーモーニングティー)から始まる」(p.4)という導入文から始まる。表紙や導入文からイギリスと紅茶を結びつけやすく、さらに貴族の文化的なイメージも合わせて持つことができるだろう。また、図 11 は枢やなによる『黒執事キャラクターガイド その執事、集合』(2009)で執事「セバスチャンの 1 日」が紹介されていたものである。朝の紅茶とアフタヌーンティーの他に、1 日の食事や銀食器の手入れも含まれているが、漫画内では圧倒的に紅茶を飲んでいる場面が多く登場する。



図 10 漫画第 1 巻と第 2 巻の表紙(枢やな、『黒執事』第 1 巻、第 2 巻、2007 年)

02:00	00:00	23:00	22:00	21:00	20:00	18:00	15:30	14:00	12:30	10:00	09:30	08:30	06:00	05:50				
雑用全般を終え、仕事終了	翌日の朝食の仕込み	屋敷内の施錠や火等の管理	主人就寝	主人の就寝準備（風呂、着替え）	銀食器の管理	ディナーの後片付け	主人のディナー	夕食の準備開始	主人のアフタヌーンティ	午後の紅茶の準備開始	主人の昼食	主人の朝食	朝食の盛り付け、配膳	主人の身支度を手伝う （朝風呂、着替え）	主人を朝の紅茶で起こす	新聞のアイロン掛け 使用人への指示出し	主人の朝食の準備開始	起床 身支度

図 11 キャラクターガイドによる、執事セバスチャンの 1 日
 (枢やな『黒執事キャラクターガイド その執事、集合』、2009、pp.12-13)

次に、執事とマナーの繋がりについて論じる。アニメ『黒執事』が放送されたのちに、『黒執事』のキャラクターを用いたマナーを学ぶことのできる雑誌が出版された(図 12、学研プラス、2009)。漫画内でセバスチャンは執事でありながらも、ダンスや貴族としてのマナーなどを主人のシエルに教えることが多く、図 12 からわかるように、メガネを着用することで家庭教師のような装いをすることもある。そのため、貴族の文化を教える執事、教師的な役割を果たす執事というイメージができたと考えられる。また、雑誌のタイトルには「お嬢様」という言葉が含まれている。



図 12 『黒執事セバスチャンが教える愛されるお嬢様マナー』
 (左側が執事セバスチャン、右側が伯爵家当主シエル、学研プラス、2009、表紙)

本節では執事と紅茶文化、そしてマナー講座との繋がりについて検討した。漫画『黒執事』では主人公がお酒の飲めない年齢である少年のため、執事セバスチャンの仕事の内容に紅茶が取り入れられ、給仕する様子が印象に残りやすくなったことが分かった。また、主人への家庭教師的な役割や指導する場面から、紳士や淑女になるために必要な教養について執事を通して学ぶというイメージが起り、マナー講座と執事が結びつけられるようになったことが理解された。

第3節 日本語教育での活用と文化理解の可能性

前節では漫画『黒執事』が連載されていた2016年頃の執事のイメージを振り返り、紅茶や料理を給仕する様子を執事の仕事として描くことで英国としての要素が取り入れられてきたように、執事と喫茶文化が繋げられてきた事が分かった。そのため、日本における執事という文化は漫画やアニメを通して形成されている面があると考え、本節では漫画の持つ役割について文化理解という側面から検討する。漫画が日本語や日本文化の教育として語学だけでなく文化理解としても用いられていることから、漫画における海外文化への理解の可能性について検討する。また、国内において文化を学ぶ中での漫画の活用についても「執事」という文化を例に検討し、翻案や物語の改変が行われることでの文化理解への影響について論じる。

はじめに、漫画の文化理解への可能性を示す例の一つとして、日本語教育での漫画の実践例とその効果について取り上げる。日本語学研究者の幸松(2021)は2020年の10月から12月にかけて、アニメや漫画を教材として用いたオンラインによる短期日本文化研修を実施しており、研修は応募した学生のうち審査に通った日本語学習者40名と母語話者20名の合計60名によって行われた。研修終了時のアンケートでは、学習者の全員が日本文化や社会に関する知識を取得できたと感じており、さらに母語話者も同様の結果となっている。幸松(2021)は実践した日本語教育の方法を振り返るなかで、「身近な作品の中にも、お互いの文化理解を促進し、社会システムについて深い議論につなげられるネタはいくらでも転がっているということである」(p.95)として漫画の多文化共生教育としての意義を言及している。つまり、日本文化を知らない人にとって漫画は有効な教材であり、同様に日本人も日本文化を改めて知ることができるということである。幸松(2021)は教材に用いる漫画として神社や温泉、着物といった伝統文化にも繋がりやすい作品を扱っていたが、母語話者である日本人が参加しても学びが得られるとしており、それは漫画のテーマが海外文化になったとしても漫画の教材としての効果は変わらないのではないだろうか。そのため、日本だけでなく海外の文化を理解する、知る機会として漫画は有効に作用することが考えられる。

社会言語学者である東(2019)は、インドネシアで日本語を学ぶ学生に対して日本のポップカルチャーの印象についてアンケート調査を行っており、質問事項には「日本らしさ」や「日本的」イメージについて尋ねている項目がある。漫画において、「日本らしい」ものとしては、タイトルや名前、学校風景のように、日本で生活する中で目にすると考えられる要素が

挙げられている。一方で「日本らしくない」と考えられた作品の特徴としては、名前や場所、職業などから日本以外の国や文化を連想するものが見られていた。これに対して東(2019)は、「人気の高い、日本を舞台としない作品への評価から、日本側の立場からすれば『日本の代的作品』であったとしても、現地においては、受容が広がるとともに、日本の作品であること自体は意味をなさない可能性があることを確認した」(p.14)と分析している。このアンケートでも漫画『黒執事』は項目に含まれており、「セバスチャン」という名前や執事という職業から日本らしくないと分類されている。東(2019)は海外の漫画需要に対して日本らしさは作品の人気と関わらないと分析しているが、日本から漫画を輸出する際の翻訳過程で名前を変化させて日本人らしくない名前にしたり、海外の文化に合わせて日本らしさを除外したりする同化的翻訳が行われることがあると分析している。文化的背景や社会的背景を知らながら翻訳をおこなっていくことは重要であるが、文化の理解を意識しすぎた翻訳を行う必要はなく、作品の内容が伝わるように忠実に翻訳しても、読者は楽しむことができるのではないだろうか。

以上のことから、漫画は日本人にとって、時には日本語学習者にとって、執事という文化を知るきっかけになり、そして執事喫茶や英国と異なった日本独自の執事像の形成のように、新しい文化が作り出される場となりうると考えられる。また、アニメや映画、実写映画では市場の規模や視聴の手軽さなどから、より多くの視聴者を獲得できることや、視覚的に伝わりやすいことから、より鮮明に執事のイメージを伝えることができると考えられる。

本章では、漫画『黒執事』が持つ執事イメージと日本における執事イメージを取り上げ、そしてアニメや実写映画化における執事のイメージを論じた。はじめに執事のイメージについて「名前」を取り上げ、定着したイメージについて分析し、「セバスチャン」という名前が日本の執事のイメージの定着化し、実際の執事の仕事と漫画やアニメを混雑して考えることがあることが理解できた。次に、『黒執事』の執事文化と日本での紅茶やマナーレッスンとのつながりを分析し、実際にマナー講座の雑誌や執事から学ぶというイメージの形成に影響していることが明らかとなった。最後に、漫画が日本語や日本文化の教育として語学だけでなく文化理解としても効果的であることを検証し、文化を学ぶ中で漫画の活用することは、日本語学習者にとっても、母語話者にとっても効果的であることがわかった。

終章

今日において漫画は、日本だけでなく世界でも多くの人に閲覧されるコンテンツとなっている。多くの人が漫画やアニメを日本文化の一つとして認識するようになり、日本語を学ぶ教材としても漫画が活用されるようになったが、教材として言語だけでなく文化についても学ぶことができるとされている。そこで本論では、漫画『黒執事』とアニメや実写映画を含めた多岐にわたるコンテンツにおける執事文化の分析を主題とした。漫画読者による執事のイメージ形成と漫画やアニメにおける文化理解の可能性の検討を目的とし、英国と日本における執事文化を比較し、漫画やアニメ内における執事というキャラクターや職業の描かれ方をセリフをもとに分析し、さらにアニメや実写映画に関するアンケート調査の分析という方法を用いた。

第1章では、イギリスと日本の執事について比較した。執事を雇うことは富裕層にとって「富と成功の象徴」であり、一定の決まった仕事をこなすことが役割であったことは日本とイギリスの執事両方において共通しており、現代になって雇い主の幅広い要望にも応える柔軟性が求められるようになった。しかし、イギリスにおける執事は伝統的な仕事内容を含む一方で、日本における執事は文献や資料の不足から執事をいう職業を自由に描く傾向が見られた。また、漫画『黒執事』に登場する使用人についての分析においては、職業名や仕事内容は伝統的なイギリスの執事を参考にしていながらも、執事セバスチャンを物語の中心と捉え、使用人の役割を決めているように感じられた。さらに、キャラクターの個性や性格を優先するために、史実のように忠実に使用人の仕事が割り振られているわけではないことが理解された。

第2章では、アニメと実写映画化、そして翻訳された『黒執事』を取り上げ、漫画との違いを指摘した。アニメ『黒執事』ではアニメ作成過程において原作が十分に進んでいなかったことからアニメ用のストーリーやキャラクターが作られた。また実写映画においては登場人物の名前や性別の変更、実写映画独自のキャラクターが作られるといった事例が見られたが、このような変更は視聴者が求めるアニメや実写映画の要素と異なっていた。アニメや実写映画の制作側と視聴者の求める要素にずれが生じているが、それでも制作が続けられる理由としてはアニメの市場規模が大きく、漫画との需要の違いが見られるためだと考えられる。また、翻訳された漫画『黒執事』では、巻末に日本とイギリス文化についての注釈があり、日本人でも理解しづらいイギリスの文化や、説明をすることの難しい日本語的表現の解説が見られた。翻訳して出版するとき文化を理解できるような配慮や工夫を行うことで、日本語を含めた様々な国の言語や文化を理解することができると考えられる。

第3章では、日本における執事のイメージを振り返り、執事と関連した紅茶の文化の発展や同じ名前が繰り返し使われることによる執事イメージについて論じた。また、漫画が日本語だけでなく文化を学習するための教材として使われていることや、日本における母語話者も改めて文化の違いを認識できるコンテンツとして漫画やアニメが活用され得ることを検討し、市場規模やアニメ視聴に対する手軽さなどから、文化を学ぶ上で漫画やアニメを活

用することは、日本語学習者と日本語話者にとっても効果的であることが明らかとなった。現代の漫画に現れる執事のイメージは、英国における執事とは完全に一致するものではないが、その違いを理解することが読者にとっての文化理解となると考えられる。

以上のように、漫画『黒執事』が翻訳や翻案が行われる中では、言語や物語の内容としての変更されることによって執事という 1 つのイギリス文化を理解すること、または日本独自の執事のイメージを形成することに影響している。柔軟に対応する現代の執事や紅茶、マナー講座へのつながりといった日本独自の執事イメージの形成には、漫画『黒執事』の多様なコンテンツからの影響が大きかったことが明らかとなった。本論文では、漫画『黒執事』を一例として、漫画やアニメ、実写映画を通した執事文化の描かれ方の変化を取り上げてきた。原作である漫画『黒執事』とアニメや実写映画の違いを、キャラクターの名前やセリフの分析だけでなく、執事や使用人といったイギリス文化を主軸として様々なコンテンツ内で比較検討し、視聴者への執事イメージへの影響を指摘したことに、本論文の意義がある。

参考文献

- Butler. (1992). In *Longman Dictionary of English Language and Culture*, p.160,
Longman Group UK Limited
- Pole&Tweed.(2016). History of Butler. Retrieved November 30, 2023, from
<https://poloandtweed.com/blog/history-of-the-butler>
- Staff of Distinction. (2022). Butlers and Their Role Throughout History. Retrieved
November 30, 2023, from [https://staffofdistinction.com/how-the-role-of-butler-
has-changed-throughout-history/](https://staffofdistinction.com/how-the-role-of-butler-has-changed-throughout-history/)
- Yana T. (2007) “Kuroshitsuji vol. 1,” Square Enix.
——. (2007) “Kuroshitsuji vol. 2,” Square Enix.
——. (2008) “Kuroshitsuji vol. 4,” Square Enix.
——. (2014) “Kuroshitsuji vol. 11,” Square Enix.
- 一般社団法人日本動画協会(2023)「アニメ産業レポート 2022」
https://aja.gr.jp/download/anime-industry-report-2022-summary_jp-2-2 (最終閲覧
日 2023/11/30)
- アイブリッジ株式会社(2017)「実写映画化に関する意識調査」リサーチプラス
<https://www.research-plus.net/html/investigation/report/index110.html> (最終閱
覧日 2023/11/30)
- アニメ『黒執事』(n.d.)公式ホームページ
<https://www.kuroshitsuji.tv/1st/> (最終閲覧日 2023/11/30)
- アニメ『黒執事II』(n.d.)公式ホームページ
<https://www.kuroshitsuji.tv/2nd/> (最終閲覧日 2023/11/30)
- 新井潤美(2011)「執事とメイドの裏表 イギリス文化における使用人のイメージ」, 白水
社
- 猪瀬博子 (2010) 「マンガにみる擬音語・擬態語の翻訳手法」『通訳翻訳研究』, 10,
pp.161-176.
- 映画「黒執事」製作委員会(2014)実写映画公式ホームページ
<https://www.warnerbros.co.jp/kuroshitsuji-movie/> (最終閲覧日 2023/11/30)
- 大城太(2017)「本物の執事だけが知る大富豪の知られざる世界」, 日経ビジネス 9月19
日掲載, <https://business.nikkei.com/atcl/interview/16/083100017/091500004/?P=2>
(最終閲覧日 2023/11/30)
- 大塚萌 (2016)「日独比較文化から見る「なじみのないもの」の翻訳手法--日本マンガ
「よつぱと!」のドイツ語訳における「セミ」, 『千葉大学人文社会科学研
究』, 32, 159-179.
- 学研プラス(2009)『黒執事セバスチャンが教える愛されるお嬢様マナー』, 学研プラス

株式会社モニタス(2021)「【全国 50 万人に聞いてみた！「アニメに関する調査】を公開しました」

<https://monitas.co.jp/news/animeranking.html> (最終閲覧日 2023/11/30)

木村智子(2020)「『黒執事』を翻訳！ダジャレ・なまり交じりのせりふを英訳するワザって？」, 『English Journal』

<https://ej.alc.co.jp/entry/20201013-manga-translation-02> (最終閲覧日 2023/11/30)

久我真樹(2018)「日本の執事イメージ史 物語の主役になった執事と執事喫茶」, 星海社
熊野七絵・廣利正代(2008) 「『アニメ・マンガ』 調査研究-地域事情と日本語教材」,

『国際交流基金日本語教育紀要』, 4, 国際交流基金, pp.55-69.

坂本恵(2017)「人気キャラが総登場で大騒ぎ！まさに“劇場版”な「豪華客船編」の裏話を原作サイドが明かす」, 『コミックナタリー』, 1月27日掲載

https://natalie.mu/comic/pp/kuroshitsuji_movie01 (最終閲覧日 2023/11/30)

幸松英恵 (2021)「アニメ・マンガを活用したオンライン短期日本文化研修の可能性」『東京外国語大学論集』, 102, pp.77-97

澤村修治(2020)「少年ジャンプが転機「漫画海外進出」の難しさ」, 東洋経済オンライン, 7月5日掲載

<https://toyokeizai.net/articles/-/360154?display=b> (最終閲覧日 2023/11/30)

「執事」. 『新明解国語辞典』第7版 (2012). 三省堂, p.642.

d アニメストア(n.d.), 黒執事のアニメ一覧

[https://animestore.docomo.ne.jp/animestore/sch?searchKey=黒執事
&vodTypeList=svod_tvod](https://animestore.docomo.ne.jp/animestore/sch?searchKey=黒執事&vodTypeList=svod_tvod) (最終閲覧日 2023/11/30)

枢やな(2007a)『黒執事』第1巻, スクエア・エニックス

——(2007b)『黒執事』第2巻, スクエア・エニックス

——(2007c)『黒執事』第3巻, スクエア・エニックス

——(2009)『黒執事キャラクターガイド その執事、集合』, スクエア・エニックス

——(2011)『黒執事』第11巻, スクエア・エニックス

中村綾子(2018)「映画『マダムのおかしな晩餐会』あらすじとキャストトークイベント報告紹介」, 『Cinemarche 映画感想レビュー&考察サイト』,

<https://cinemarche.net/news/madamu-bansan-talkevent/>

(最終閲覧日 2023/12/18)

日本貿易振興機構(2019)「英国・フランスにおけるコンテンツ産業調査」

<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2019/02/9d4016c7dfbd6add.html> (最終閲覧日 2023/11/30)

葉口英子 (2022)「日本アニメ産業におけるメディアミックスの進展と最近の動向『鬼滅の刃』のメディア戦略とプロモーションに着目して」『ノートルダム清心女子大学紀要』, 46, pp.68-86.

東弘子 (2019) 「海外における日本ポップカルチャー受容のかたち-インドネシアの学生を調査対象として-」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』, 20, pp.1-16.

マイナビ進学 (n.d.) 「バトラー 旅行・ホテル・ブライダル・観光系の仕事」

<https://shingaku.mynavi.jp/future/shigoto/772/>(最終閲覧日 2023/11/30)

マイナビニュース(2013)「映画「黒執事」の主人公・剛力彩芽はファントムハイヴの末裔」, 4月5日掲載

<https://news.mynavi.jp/article/20130405-a005/> (最終閲覧日 2023/11/30)

村上リコ(2019)『図解英国執事』, 河出書房新社